



Title	金剛寺蔵<佚名諸菩薩感応抄>所引『観世音応験記』佚文
Author(s)	後藤, 昭雄
Citation	大阪大学文学部紀要. 1999, 39, p. 75-100
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12606
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

金剛寺蔵〈佚名諸菩薩感応抄〉所引『観世音応験記』佚文

後藤 昭雄

一

金剛寺（大阪府河内長野市）にその内容から〈佚名諸菩薩感応抄〉とも称すべき古鈔の書冊が伝存する。多量の經典典籍を引用するが、そのなかに中国六朝成立の観音応験記の佚文が多く含まれているのはことに貴重であると考えられるので、これを影印に付して紹介する。

〈佚名諸菩薩感応抄〉と仮称する資料から述べていこう。⁽¹⁾本書は綴帖装。縦28・2 cm、横16・0 cm。料紙は厚手の楮紙。界を押し、界高24・0 cm、界幅1・8 cm。每半葉八行書き。白絹糸で綴じたのが原装で、一部にもとの綴糸を残している。本来一具のものであったと思われるが、現在は四つに分離していて、現存するのは合わせて一一〇丁である。

書写年時については、奥書識語の類は残らず、不明であるが、縦長の書冊の体裁および本文の書体（後掲）から平安末鎌倉初期の書写と見ることができよう。

本文は漢文体。まれに返り点、句読点、傍訓が付されている。

本書は菩薩に関する多くの文献を抄出集成したもので、すべて引用文から成る。整序してみると、整然とした構成をもっていることが明らかになる。本文より一字あるいは二字下げて標題に類するものが書かれている。それによって本書の構成を見てみよう。蝕損によつ

て文字が失われている部分は□で示す。

菩薩□

□

菩薩名義

文殊

感応

普賢

感応

観音

感応

(勢至)

第一丁は白紙で、表紙と見てよいと思うが、何の文字も書かれていない。二丁表の一行目に「菩薩□」とある。三字目に蝕損があり、文字が書かれていたのかどうか不明である。二行目は二字下げで数文字が書かれていたと推定できるが、残念なことに、その部分が蝕損を被っている。八丁表一行目に「菩薩名義」とあり、以下一三丁裏まで続き、一四丁表一行目に「文殊」とある。

初めの「菩薩□」から「菩薩名義」までがいれば菩薩についての総論であり、「文殊」以下は各論である。なお、勢至のことは、観音の「感応」の標題に付された「依文少付勢至」の注記から、観音に付載されていたことが知られるが、現存部分にはない。各論の部分もそれぞれ前後二つに分かれていて、前半にはその菩薩に係のある經典を抄出引用する。後半は「感応」の標題が示すように、各菩薩の感応靈験説話の引用から成る。この各論部分の構成は、『法苑珠林』の、当該篇の主題に係のある経論を引いて証拠とする「引証部」と、そして「感応縁」とを想起させる。

本書が注目されるのは、書写年代の古さと相俟って、「感応」部に多くの文献からの引用があることである。それは中国の『観世音心験記』『観音義疏』『法華伝記』『大唐西域記』『広清涼伝』『三宝感応要略録』、および日本の『日本霊異記』『善家秘記』『本朝法華験記』などであるが、ことに『観世音心験記』からの多くの引用が遺存することは貴重であると考えられる。

中国の六朝時代にはいくつかの観音心験記が編纂されている。そのことは『観音義疏』、『法華義疏』また『冥報記』序文の記述、および『法苑珠林』などの引用によって知られていたが、それらは中国にも、また日本にも伝わらず、すでに散佚したと考えられていた。ところがその観音心験記が日本に遺存していたのである。京都の青蓮院吉水蔵に発見され、紹介、公刊された。⁽³⁾

この書は、巻頭に「繫勸世音心験」と記し、宋の傅亮の『光世音心験記』七条、齊の張演の『統光世音心験記』十条、同じく齊の陸杲の『繫観世音心験記』六十九条から成る。

本書も書写奥書を持たない。従って、その書写年代については、この書の存在を初めて記した渋谷亮泰編『昭和現存天台書籍綜合目録』（明文社、一九四四年）では「南北朝写」としたが、一九八八年に本書が重要文化財に指定されるに当たっては「本文の書風よりみて、その書写は平安時代後期を降らないもの」とされている。⁽⁴⁾

この中国六朝成立の『観世音心験記』からの抄出引用が〈佚名諸菩薩感応抄〉に多数ある。

〈感応抄〉の観音の感応部には四十二条の引用があるが、その第三条の伝の末尾に「已上心験記」の注記がある。これに従って確かめると、この伝は『繫観世音心験記』の第三条に一致し、また第一条・第二条も同じく『繫観世音心験記』の第一・第二条と同じである。すなわち注記にいう「心験記」は『観世音心験記』であることが明らかになるが、その引用は以上の三条にとどまらない。結局、観音感応部四十二条のうち、六条を除いてはすべて『観世音心験記』からの引用である。

以下、それを一覧にして示す。上に観音感応部所引の各伝の標題、これを欠くものは主人公の名を示す。番号は通し番号（番号が飛んでいるものは他の文献からの引用である）。下にこれに対応する伝の、『観世音心験記』における所在を示す。三心験記は「光」「統」「繫」と略称し、『六朝古逸観世音心験記の研究』所収の翻刻に付せられた番号と共に示す。

- (1) 釈法力道人↓ 繫 1
- (2) 釈法智道人↓ 繫 2
- (3) 呉興郡吏↓ 繫 3
- (5) 海塩一人↓ 繫 4
- (6) 伏万寿↓ 繫 7
- (7) 竺法純↓ 繫 8
- (8) 梁声↓ 繫 9
- (10) 鄴西寺三胡道人↓ 光 3
- (11) 山賣伝↓ 光 4 (寶伝)
- (12) 念観音官司薄因無其名↓ 統 4
- (13) 婦女観音貫木自拔圜門更開↓ 統 7
- (14) 蓋護念観音異光照之前道↓ 繫 19
- (15) 王球誦経夢得妙文覚遂免鎖↓ 繫 23
- (16) 僧洪在閤模像胸仏↓ 繫 22
- (17) 王蔡念観音其身在𦵏外↓ 繫 27
- (18) 道人至心却賊迷惑↓ 繫 41
- (19) 河北一老尼↓ 繫 42
- (20) 毛德祖専念溲雨連々虜騎逃返↓ 統 8
- (21) 道人念宝号劫□□入身↓ 繫 11
- (22) 法禪一心大士賊弓不放主↓ 繫 12
- (23) 像持頭上寇刀自析斫↓ 繫 14

- (24) 子教至心刑人眠就↓ 繫 17
- (25) 乾鍾誦經埋土自脫↓ 繫 50
- (26) 開達誦經大虎□□柵↓ 繫 46
- (27) 婁安起↓ 繫 47
- (30) 王桃念觀音虎捨之志↓ 繫 68
- (31) 法願念觀音□↓ 繫 69
- (32) 僧融誦經降伏鬼神↓ 続 6
- (33) 惠簡念光世音鬼神捨居処去↓ 続 3
- (34) 病人念觀音□□臂摩其痕↓ 繫 66
- (35) 精思誦經聾亡開明↓ 繫 67
- (36) 癩疾之人擬遷居念觀音所病便愈↓ 繫 65
- (37) 法義致誠夢中洗符藏↓ 光 7
- (38) 姓台念觀音期日產生↓ 繫 55
- (39) 老嫗挑燈万里之外指光↓ 繫 63
- 標題の下に小字で「冥報記」の注記があるが、この話は『冥報記』には見えない。
- (40) 帛法祈声其音清美↓ 光 2
- 以上であるが、『光世音應驗記』七条のうちの四条、『続光世音應驗記』十条のうちの五条、『繫觀世音應驗記』六十九条のうちの二十六条が〈佚名諸菩薩感應抄〉に引用されている。
- これだけ多くの『觀世音應驗記』からの引用があるということは大きな意味を持つ。その最も大きな価値は『觀世音應驗記』の校勘資料としてのそれであろう。
- 青蓮院本は『觀世音應驗記』の伝本として唯一のものであり、当然のこととして、対校に用いるべき異本はない。そこで青蓮院本の

文を公にした牧田氏は、翻刻にあたって『観音義疏』『法華伝記』、高僧伝などを校勘資料として校定を行っているが、この〈佚名諸菩薩感応抄〉はこれに加えられるべき資料である。しかも日本における写本で、書写年代もほぼ拮抗するという、より近縁性の高い文献である。

さらに、『観世音応驗記』所収の伝が他の文献に採録されているものについては、前述のように、これを校勘に用いることができるが、なかには、この『応驗記』のみにあって、同話が他の文献には全く見いだせないものがある。そういう伝については、この〈佚名諸菩薩感応抄〉が唯一の校勘資料となる。前掲の一覧の番号で示すと、(5)(10)(12)(17)(18)(19)(34)(36)の八条がそうである。

三

注3にあげた牧田諦亮氏の著書所収の「観世音応驗記の研究」は現在補訂の作業が行われているという。〈佚名諸菩薩感応抄〉引用佚文が校勘に用いられるはずである。

『観世音応驗記』は日本に佚存の書として、南開大学(中国天津市)の孫昌武氏の手により中国で公刊された。孫昌武校点『観世音応驗記(三種)』(中華書局古小説叢刊、一九九四年)。これには注1の旧稿に、青蓮院本と対校して示した〈佚名諸菩薩感応抄〉引用本文が(5)(14)(17)(27)のみであるが、校勘資料として用いられている。

さらに衣川賢次氏によって『光世音応驗記』の訳注がなされた(「傅亮『光世音応驗記』訳注」『花園大学文学部研究紀要』二十九号、一九九七年)。これにも〈感応抄〉所引佚文が「金剛寺本」として、本文校定に用いられている。また付して〈感応抄〉の書影七葉が掲げられている。

このように、『観世音応驗記』研究の進展のなかで、〈佚名諸菩薩感応抄〉引用佚文は本文校定に不可欠の資料として利用されつつある。こうした研究状況のもとで、その引用佚文の全容を紹介することは、観世音応驗記の研究は当然のこととして、前記孫昌武氏の編者が「古小説叢刊」の一冊であることにも示されるように、中国古小説研究にも資するものとなろう。

注

- (1) 「金剛寺藏〈佚名諸菩薩感応抄〉」（『説話文学研究』二十八号、一九九三年）参照。なお、この論文執筆後にツレの一四丁を見いだした。以下に述べるのはこれに加えてのものである。
- (2) このうち『日本霊異記』および『善家秘記』については、「金剛寺藏〈佚名諸菩薩感応抄〉考」所引の『日本霊異記』と『観音三昧経』について（『国語と国文学』七十一巻八号、一九九四年）、『三善清行『善家秘記』の新出佚文』（佐伯有清先生古稀記念会編『日本古代の祭祀と仏教』、吉川弘文館、一九九五年）に詳しく述べた。
- (3) 塚本善隆「古逸六朝観世音応験記の出現」（『京都大学人文科学研究所』創立二十五周年記念論文集、一九五四年）、牧田諦亮「六朝古逸観世音応験記の研究」（平楽寺書店、一九七〇年）。
- (4) 『月刊文化財』三一〇号（一九八九年七月）。

凡例

- 一、金剛寺藏〈佚名諸菩薩感応抄〉観音感応部所引の『観世音応験記』佚文の影印とその翻刻である。
- 二、翻刻は影印に対応させた。従って、行取り、字配りは原本の通りである。
- 三、『観世音応験記』の引用でない条(4)(9)(28)(29)については翻刻を付さなかった。
- 四、漢字は通行の字体を用いた。いわゆる俗字、異体字、抄物書（「井」≡菩薩のみ）は正字に改めたが、一部もとの字体のままにしたものもある。
- 五、欠損の文字は□、「□」で示し、残画から推定した場合は（ ）に入れて示した。
- 六、見せ消ち、転倒符の付された文字はそれらに従って改めたかたちで示した。注記はしない。

注記

中略、後略がなされている条がある。

(30)(31)(37)(39)の四条は「○」の部分に数文字の省略がある。

(6)(7)(8)(17)(24)(27)(32)(38)(39)の九条は末尾に省略がある。それらには「云々」あるいは「○」の符号が置かれるが、(7)のみは、これをも欠く。



感應

依文少付勢至

持法力道人精苦有業行欲於贈郡立精舍而錢
 物不足與沙門明琛往上谷乞得一車麻裁行空泚遂
 遇野火車在風下无得免理于時法力倦眠覺而火勢
 已及舉聲稱觀未得言世音便自應聲風轉火滅无
 他而歸
 尺法智道人者于昔為白衣嘗獨行大沢忽遇猛火四
 面俱既欲走无向処自知必死因頭面礼光觀世音至心稱

感應

依文少付勢至

(1) 积法力道人精苦有業行欲於贈郡立精舍而錢
 物不足與沙門明琛往上谷乞得一車麻裁行空泚遂
 遇野火車在風下无得免理于時法力倦眠覺而火勢
 已及舉聲稱觀未得言世音便自應聲風轉火滅无
 他而歸
 (2) 尺法智道人者于昔為白衣嘗獨行大沢忽遇猛火四
 面俱既欲走无向処自知必死因頭面礼光觀世音至心稱

L (14)



喚名号俄而火過一沢草无遺莖唯法智所在処容身不燒也

(3) 宋元嘉中吳興郡嘗大火發治下民人居家都尽唯一

家是草屋在火腹独存太字王詔之出見火以為恠異使人尋問乃郡吏家也此事索不事仏但聞王道光世音

因大起滅遂以至心得免也已上應驗記

(4) 竺長舒↓觀音義疏卷上

(5) 海塩有一人年四十以海探為業波入海遭敗同船尽死唯

此人不死独与波沈浮遂得一石因住身其上而此猶或出或

没判是无復生理此人乃本事仏而嘗聞觀世音於是心

念口叫至誠无極因得眠如夢非夢見兩人乘一小船喚

其来入即驚起開眼遂見真有事跳越就之入便至岸

向者船又不覺失去此人(遂)出家殊精進作沙門

伏萬壽平昌人居都下宋元嘉十九為衛軍行佐府
 主臨川劉義慶慶鎮廣陵萬壽請暇還郡暇比四更
 中遇大江天極請靖半江忽遇大風船便欲覆既夜尚聞
 不知所向萬壽本信佛法當尔絕念觀世音須臾見北
 岸有光如村中燃火同舟皆見謂是歐陽火也直往就之
 不曙而至訪問村中皆云无燃火者云々
 山陰縣頭法義寺主竺法純晉元興時人也起寺行墟出
 枝格上買依暮將一手力戴柱渡湖半漲便遺惡
 風船重欲覆法純無計一心誦觀世音經尋有一空船如
 人乘來直進相就法純得分載人柱方船徐濟復以船遍
 示郭野竟自无主
 梁聲居河北虜後叛歸南夜半過川為俊流所轉船覆
 落水聲本事但唯念觀世音向大半河遭敗去岸殊
 遠一沈一浮飲水垂死忽然覺脚得踏地已在岸上明日
 視昨上絕岸甚高非人力何然云々

(6) 伏萬壽平昌人居(都)下宋元嘉十九為衛軍行佐府

主臨川劉義慶鎮廣陵萬壽請暇還郡暇比四更

中遇大江天極請靖半江忽遇大風船便欲覆既夜尚聞

不知所向萬壽本信佛法當尔絕念觀世音須臾見北

岸有光如村中燃火同舟皆見謂是歐陽火也直往就之

不曙而至訪問村中皆云无燃火者云々

(7) 山陰縣頭法義寺主竺法純晉元興時人也起寺行墟出

枝格上買依暮將一手力戴柱渡湖半漲便遺惡

風船重欲覆法純無計一心誦觀世音經尋有一空船如

人乘來直進相就法純得分載人柱方船徐濟復以船遍

示郭野竟自无主

(8) 梁聲居河北虜後叛歸南夜半過川為俊流所轉船覆

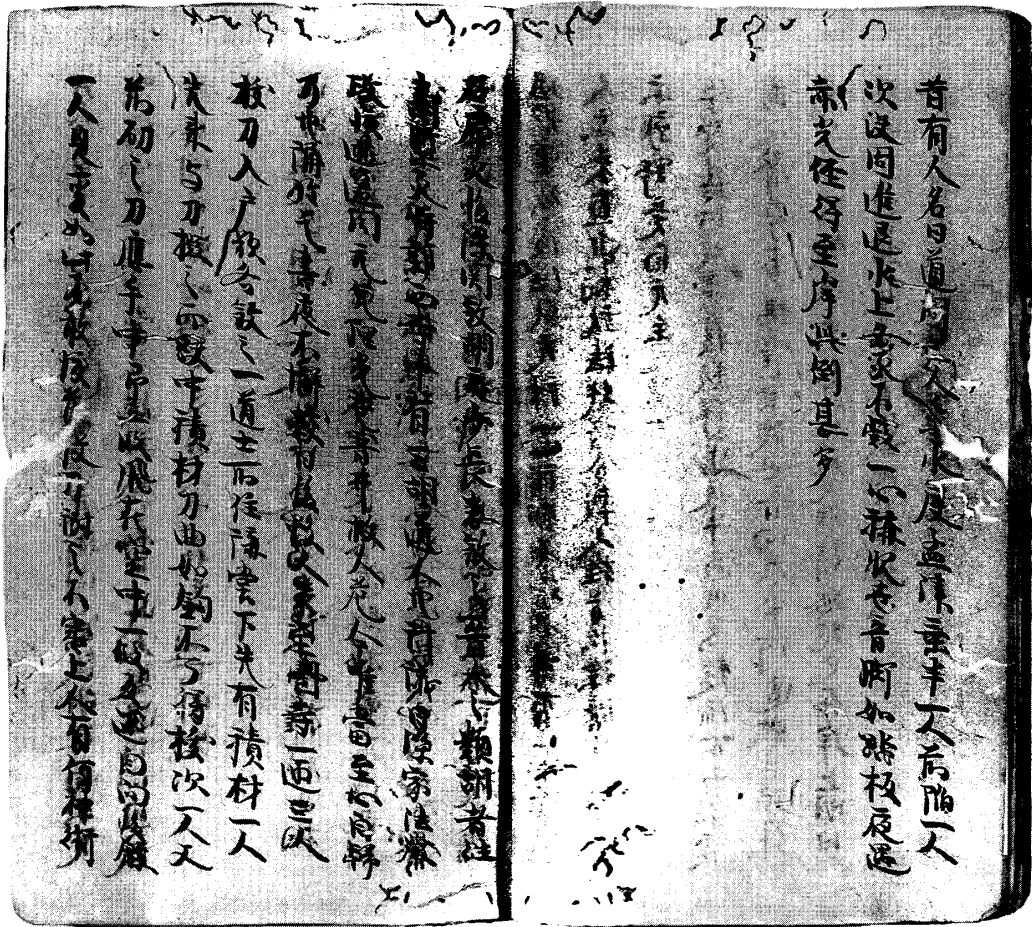
落水聲本事但唯念觀世音向大半河遭敗去岸殊

遠一沈一浮飲水垂死忽然覺脚得踏地已在岸上明日

視昨上絕岸甚高非人力何然云々

L (34)

L (27)



昔有人名曰道問者。因事入山。及至深處。有一人。前臨一人。次因進退水上。去及不數一。林火也。音阿如踏板。及還。亦交徑。存至序。此倒其夕。

石虎死後染闕殺胡无少長悉殺之。晋人之類胡者。往々胡濫死時。鄴西寺中有三胡道人。共計議曰。染家法嚴。政復逃匿。同无免理。光世音菩薩救人危。今唯當至心自歸。乃共誦經。乞昼夜不懈。數日後。收人來至。圍寺一匝。三人拔刀入戶。欲各殺之一道士。所住講堂下。先有積材一人。先來与刀擬之。而跌中積材。刀曲如鉤。不可得拔。次一人又前。初之刀。應手中。即一段飛在空中。一段反還。自向後。餘一人見變如此。不敢復前。投刀謝之不審。上人有何神術。

(9) (道問↓觀音義疏卷上)

(10) 石虎死後染闕殺胡无少長悉殺之。晋人之類胡者往

々胡濫死時鄴西寺中有三胡道人共計議曰染家法嚴政復逃匿同无免理光世音菩薩救人危今唯當至心自歸乃共誦經乞昼夜不懈數日後收人來至圍寺一匝三人拔刀入戶欲各殺之一道士所住講堂下先有積材一人先來与刀擬之而跌中積材刀曲如鉤不可得拔次一人又前初之刀應手中即一段飛在空中一段反還自向後餘一人見變如此不敢復前(投)刀謝之不審上人有何神術

乃今日刃傷道人答曰□實無術聞官殺胡恐自不免
唯歸心光世音當是感神聆祐耳此人馳還白闕具說
事然閱即勅時特原三道人臺在鄴親所聞見

山賣傳者河內人永和中高昌呂護各擁那曲相
与不和傳為昌所用作官長護遣騎抄繫為俘執同
伴六七人共繫一獄鎖械甚嚴尅日當殺沙門支道山
時在護營中与傳相識聞其幽執至獄所候視之隔

戶共語傳謂山日困厄命在漏刻何方相救山日人事不
見其方唯觀世音并救人厄難若能至心歸請必有感
應傳亦先聞光世音及得山語遂專心屬心晝夜三日至誠
自歸內視其鎖械如覺緩解有於常聊誠推盪摧然離
傳乃復至心日今蒙哀祐已令桎梏自解而同伴尚多无
情獨去光世音神力普濟當令俱免言畢竟復牽槐餘
人皆以次解落有割剔之者遂開戶走出行於警之間莫
有覺便踰城逕去時□已向曉行四五里天明不敢復進

乃今日刃傷道人答曰□實無術聞官殺胡恐自不免
唯歸心光世音當是感神聆祐耳此人馳還白闕具說
事然閱即勅時特原三道人臺在鄴親所聞見

(1) 山賣伝者河内人也永和中高昌呂護各擁那曲相

与不和伝為昌所用作官長護遣騎抄繫為俘執同

伴六七人共繫一獄鎖械甚嚴尅日當殺之沙門支道山

時在護營中与伝相識聞其幽執至獄所候視之隔

戸共語伝謂山日困厄命在漏刻何方相救山日人事不

見其方唯觀世音菩薩救人厄難若能至心歸請必有感

応伝亦先聞光世音及得山語遂專心屬心晝夜三日至誠

自歸内視其鎖械如覺緩解有於常聊誠推盪摧然離

伝乃復至心日今蒙哀祐已令桎梏自解而同伴尚多无

情獨去光世音神力普濟當令俱免言畢竟復牽槐餘

人皆以次解落有割剔之者遂開戸走出行於警之間莫

有覺便踰城逕去時□已向曉行四五里天明不敢復進

(5才)

(4才)



苦逃隱一秦中須臾□失囚人馬馱四出尋捕焚草
 殘林无幽不遍伝所隱処一畝許地終无至者遂得免勝
 還鄉里敬信異常奉仏法道山後過江為謝度緒具
 說其事

念觀音官司薄目无其名

昔孫賊擾亂海垂士鹿多離其災有十數人臨形東市
 一人獨奉法使至意誦光世音同坐問之対曰聞仏法経有
 光世音菩薩濟人危故日帰耳其使事効之次当就命官
 司薄目独无其名相与驚駭恠乃各散走二人亦随衆遂得
 免

婦女觀音貫木自拔圍門更開

僧融又嘗与尺曇翼於江陵勸一人夫妻授戒後其人為
 劫所取因遂越走執婦繫獄融遇涂見之求哀救対曰唯
 当一心念光世音耳无餘術婦人便称念不輟幽囚経時後
 夜夢見沙門立其頸間以足蹴之令去婦人驚覺身母三
 木忽日離解見門猶閉□司数重守之謂无出理還目穿

(12) 念觀音官司薄目无其名

昔孫賊擾亂海垂士鹿多離其災有十數人臨形東市
 一人獨奉法使至意誦光世音同坐問之対曰聞仏法経有
 光世音菩薩濟人危故日帰耳其使事効之次当就命官
 司薄目独无其名相与驚駭恠乃各散走二人亦随衆遂得
 免

(13) 婦女觀音貫木自拔圍門更開

僧融又嘗与尺曇翼於江陵勸一人夫妻授戒後其人為
 劫所取因遂越走執婦繫獄融遇涂見之求哀救対曰唯
 当一心念光世音耳无餘術婦人便称念不輟幽囚経時後
 夜夢見沙門立其頸間以足蹴之令去婦人驚覺身母三
 木忽日離解見門猶閉□司数重守之謂无出理還目穿

着有須得眼復夢向人(曰)何以不去門自開也既起乃越人向
 門々開得出東南行數里將至民居時天夜晦冥忽逢一人
 初甚駭懼其夫亦依竄草野昼伏夜行各相問訊其乃夫
 妻也遂共投翼々即藏之寺內別処无何其鄉人有遠
 商者翼令隨去竟得免也
 蓋護念觀音異光照之前道
 蓋護山陽人也嘗係獄處死至心誦觀世音經三日三夜心无
 間恩忽於夜中眼見觀世音大放光照之即時鎖械自脫戸自
 開光便引護出去隨光而行走行得廿里地於是滅護宿草中明
 日徐得免
 王球誦經夢得妙文竟遂免鎖
 王球字叔術大原人也宋元嘉九年作信陵郡坐遭賊
 失守繫江陵獄着一大鎖釘之極堅球在獄中恒時齊長
 誦觀世音經一夜忽夢已自坐高坐上有道人与其一分經題
 云光明安行品并諸菩薩名球開誦忌第一菩薩名憶第二觀世音
 第三是大勢至皆有国 [] 因是眼覺便見雙鎖已解

着有須得眼復夢向人(曰)何以不去門自開也既起乃越人向
 門々開得出東南行數里將至民居時天夜晦冥忽逢一人
 初甚駭懼其夫亦依竄草野昼伏夜行各相問訊其乃夫
 妻也遂共投翼々即藏之寺內別処无何其鄉人有遠
 商者翼令隨去竟得免也

蓋護念觀音異光照之前道

蓋護山陽人也嘗係獄處死至心誦觀世音經三日三夜心无
 間恩忽於夜中眼見觀世音大放光照之即時鎖械自脫戸自
 開光便引護出去隨光而行走行得廿里地於是滅護宿草中明
 日徐得免

王球誦經夢得妙文竟遂免鎖

王球字叔術大原人也宋元嘉九年作信陵郡坐遭賊
 失守繫江陵獄着一大鎖釘之極堅球在獄中恒時齊長
 誦觀世音經一夜忽夢已自坐高坐上有道人与其一分經題
 云光明安行品并諸菩薩名球開誦忌第一菩薩名憶第二觀世音
 第三是大勢至皆有国 [] 因是眼覺便見雙鎖已解

着有須得眼復夢向人(曰)何以不去門自開也既起乃越人向

門々開得出東南行數里將至民居時天夜晦冥忽逢一人

初甚駭懼其夫亦依竄草野昼伏夜行各相問訊其乃夫

妻也遂共投翼々即藏之寺內別処无何其鄉人有遠

商者翼令隨去竟得免也

(14) 蓋護念觀音異光照之前道

蓋護山陽人也嘗係獄處死至心誦觀世音經三日三夜心无

間恩忽於夜中眼見觀世音大放光照之即時鎖械自脫戸自

開光便引護出去隨光而行走行得廿里地於是滅護宿草中明

日徐得免

(15) 王球誦經夢得妙文竟遂免鎖

王球字叔術大原人也宋元嘉九年作信陵郡坐遭賊

失守繫江陵獄着一大鎖釘之極堅球在獄中恒時齊長

誦觀世音經一夜忽夢已自坐高坐上有道人与其一分經題

云光明安行品并諸菩薩名球開誦忌第一菩薩名憶第二觀世音

第三是大勢至皆有国 [] 因是眼覺便見雙鎖已解

L (7才)

L (6才)



珠知有感應不復憂(怖)因(自)沿具鎖依常着之涉三日
 事非意便散珠元嘉十九年見衛府行參軍從鎮廣
 陵精進甚矣

僧洪在圍模像胸仏

道人尺僧洪者都下凡官寺作丈六銅像始得作畢于時
 晉義熙十二年大禁鑄銅僧洪未得開模見像便為
 官所收繫在相府判奸罪心入死僧誦念觀世音經得
 一月日忽夢見其所作像來至獄中以手摩其頂問汝

怖不僧洪以事答像曰无所憂也夢中見像前方一尺許銅
 色焦沸得遂至出市見殺示日府參軍應監形初喚駕
 車而牛絕不肯入既入便奔車即粉碎遂至冥無監更
 復尅日因有勅從彭城還道若未殺僧洪者可原既出破模
 着像果胸前如夢此像今在瓦官寺也

王蔡念觀音其身在此外

王蔡陽平人也魏虜當欲殺鎖械內土礪裏深廿餘丈或
 有飲食皆懸與之蔡(本事)□先謗觀世音經於是至念

(16)

僧洪在圍模像胸仏

道人尺僧洪者都下凡官寺作丈六銅像始得作畢于時
 晉義熙十二年大禁鑄銅僧洪未得開模見像便為
 官所收繫在相府判奸罪心入死僧誦念觀世音經得
 一月日忽夢見其所作像來至獄中以手摩其頂問汝

怖不僧洪以事答像曰无所憂也夢中見像前方一尺許銅
 色焦沸得遂至出市見殺示日府參軍應監形初喚駕
 車而牛絕不肯入既入便奔車即粉碎遂至冥無監更
 復尅日因有勅從彭城還道若未殺僧洪者可原既出破模
 着像果胸前如夢此像今在瓦官寺也

(17)

王蔡念觀音其身在此外

王蔡陽平人也魏虜當欲殺鎖械內土礪裏深廿餘丈或
 有飲食皆懸與之蔡(本事)□先謗觀世音經於是至念

誦得滿千反夜忽然覺口自出(剛)外而无復鎖械因是走遁即便得免云々

道人至心却賊迷惑

益洲有一道人從來山居後忽遭賊欲起逃走勢不得去因還住坐至心稱觀世音賊向已見在屋裏而入屋自迷惑不見之自相謂曰此是神必能殺我各競去

河北有老尼薄有資財為賊所掠尼既無計仰天絕喚

觀世音忽聞空中有噫聲響振遠近群盜驚怖一時散走諸物皆得不失

(18) 毛德祖專念深雨連々虜騎逃返

毛德祖始歸江南出開敷里虜便遣人騎迎尋之其携將家累十余口聞追在便伏道側蓬萊之中殆不自客其徒騎相懸分无脱理唯闔門共婦念觀世音菩薩有須天忽深雲始車蓋仍大深雨追者未及數十大遇雨不得近便返德遂合家免去云々

(19) 河北有老尼薄有資財為賊所掠尼既無計仰天絕喚

觀世音忽聞空中有噫聲響振遠近群盜驚怖一時散見之自相謂曰此是神必能殺我各競去

L (87)

毛德祖始歸江南出開敷里虜便遣人騎迎尋之其携將家累十余口聞追在便伏道側蓬萊之中殆不自客其徒騎相懸分无脱理唯闔門共婦念觀世音菩薩有須天忽深雲始車蓋仍大深雨追者未及數十大遇雨不得近便返德遂合家免去云々

L (97)



(21) 道人念宝号劫□□入身

北有一道人於壽陽西山中行忽有多人出劫之縛脾着樹欲
殺取衣物道人至心喚觀世音劫遂斫之不入因自大怖放
捨而去

(22) 法禪一心大士賊弓不放主

開中道人法禪等五人當姚家時山行逢賊既无逃走処唯
共一心念觀世音賊挽弓射之遂手不得放謂言神怖憐
各走法禪等五人安隱得去

(23) 像持頭上寇刀自斫研

蜀有一白衣以梅檀函貯觀世音像繫頭髮中值姚甚
寇蜀此人身在陳臨戰正与喪手自斫之其唯項中
然有声都不覺痛既得散走逃入林中賊去解髮視
函々形如故開出見像身有研痕始悟向者之声是中
像其人悲感靈傷我身反損聖形蓋悟慈靈後倍精進云々

(24) 子教至心刑人眠就

南公子教始平人也□城為虜兒長樂公所破

L (10才)



城守數千人一時被
顧救濟及至交刀見斫而沒自不申又行刑人忽自睡
就便不能舉手時虜主自監見驚問故子教不覺那
忽善能作馬鞍虜主即便置之當時亦不自覺善導
此唯覺正存念而已被置之後尋因得婦作小觀世音金
像以梅檀函供養行則頂戴不具人知至于年老精問
轉篤。

乾鍾誦經埋土自脫

西海大字吳乾鐘者本奉佛法精進恒誦觀世音經嘗
虜所抄縛脾埋腰欲走馬射之以為觀戲吳因婦命觀世
音特自苦至於是天忽大雨至冥不自虜不能出悉以氈
自覆吳失時縛時甚急兼埋在土中不覺忽自得脫因
尔而走虜軍覺之馬騎乱逐相去小許而策馬終不能
及遂得脫去

城中數萬人一時被
雖知必死猶至心念觀世音
顧救濟及至交刀見斫而沒自不申又行刑人忽自睡
就便不能舉手時虜主自監見驚問故子教不覺那
忽善能作馬鞍虜主即便置之當時亦不自覺善導
此唯覺正存念而已被置之後尋因得婦作小觀世音金
像以梅檀函供養行則頂戴不具人知至于年老精問
轉篤。

(25) 乾鍾誦經埋土自脫

西海大字吳乾鐘者本奉佛法精進恒誦觀世音經嘗
虜所抄縛脾埋腰欲走馬射之以為觀戲吳因婦命觀世
音特自苦至於是天忽大雨至冥不自虜不能出悉以氈
自覆吳失時縛時甚急兼埋在土中不覺忽自得脫因
尔而走虜軍覺之馬騎乱逐相去小許而策馬終不能
及遂得脫去

開達誦經大虎
道人尺開達以晉隆安二年北上壘掘甘草時羌中大餓皆
捕生口食之開達以晉為羌所得閉置柵裏以捩食等伴
肥者次當見及開達本請觀世音經既急一心歸命恒潛誦
誦日夜不息羌食柵人漸欲就盡餘開達與一小兒以擬
明日當食之開達急夜誦經係心特苦垂欲成就羌來取之開
達臨急愈至猶望一盛忽然見有大虎從草趨出跳距大
叫諸羌一時怖走虎因柵作一小穿足得道人便去開達仍
將小兒走出逃叛得免

叟安起河東人也從虜中叛歸至河辺不得過望見追騎
在後死在須臾於是喚觀世音始得數聲仍見一白狼從
草中出仰視安起廻還繞之安起因不暇視狼還入草中斯
須追至起心悟復喚狼若是觀世音更來救我善此未竟
応声即出安起跳往抱之狼一擲便過南岸集止之間
嗛失狼所在追騎共在北岸望之歎惋无極云々

(26) 開達誦經大虎 柵

道人尺開達以晉隆安二年北上壘掘甘草時羌中大餓皆
捕生口食之開達以晉為羌所得閉置柵裏以捩食等伴
肥者次當見及開達本請觀世音經既急一心歸命恒潛誦
誦日夜不息羌食柵人漸欲就盡餘開達與一小兒以擬
明日當食之開達急夜誦經係心特苦垂欲成就羌來取之開
達臨急愈至猶望一盛忽然見有大虎從草趨出跳距大
叫諸羌一時怖走虎因柵作一小穿足得道人便去開達仍
將小兒走出逃叛得免

(27) 叟安起河東人也從虜中叛歸至河辺不得過望見追騎
在後死在須臾於是喚觀世音始得數聲仍見一白狼從
草中出仰視安起廻還繞之安起因不暇視狼還入草中斯
須追至起心悟復喚狼若是觀世音更來救我善此未竟
応声即出安起跳往抱之狼一擲便過南岸集止之間
嗛失狼所在追騎共在北岸望之歎惋无極云々

宋元初中有黃龍以法象元為彌散音此法行於
 屬安五人往尋佛以天竺舍衛路逢山有一群鴨買
 爾念有所不從林中分等發身奔走復有野牛等
 而未情狀宗又中初發念有大雲龍象中使發身
 得冠冕

王桃念觀音虎捨之志

王桃念觀音虎捨之志
 王桃京兆杜人也性好殺害少為獵師年過卅後於林中
 遇虎即牽弩射虎此虎傷走後有一虎從後齧桃
 兩脚皆碎猶不自置桃憶先聞道人說觀世音仍至心歸
 念便見放桃因得起虎猶怒自墳太叩繞之桃逾投心至念
 虎遂置之而去桃還家自誓云若不瘡死當奉仏受戒
 尋得着愈竟成精進人

(28)

〔曇鸞齋經師子〕象↓法苑珠林卷65

(29)

〔未詳〕

(30)

王桃念觀音虎捨之志

王桃京兆杜人也性好殺害少為獵師年過卅後於林中
 ○遇虎即牽弩射虎此虎傷走後有一虎從後齧桃
 兩脚皆碎猶不自置桃憶先聞道人說觀世音仍至心歸
 念便見放桃因得起虎猶怒自墳太叩繞之桃逾投心至念
 虎遂置之而去桃還家自誓云若不瘡死當奉仏受戒
 尋得着愈竟成精進人

L (127)

L (137)



(31) 法願念觀音

法願道人上黨襄恒人也本性薰名良嘗從沙門還熏恒
 路徑中忽遇雷雨大闇虎狼亂走憂怖無計便至心念觀
 世音須臾雨止前行仍見有居家進告家宿主人住之甚好
 曙乃覺故盤石上眠但見空林而已○後遂出家恒住蜜
 雲山中宋元壽時人也

〔137〕

(32) 僧融誦經降伏鬼神

積僧融篤志汎愛勸江陵一家令合門奉仏其先有神
 寺數間以与之宛給僧用融便毀徹大小悉取因留設福七日
 還與之後主人母忽見一鬼持赤索欲縛之母甚憂懼乃請
 沙門轉經鬼恠遂白无融後還空山道中獨宿逆旅時天雨山
 夜始眠忽見鬼吾兵甚衆其一長者帶申挟刃形甚宏
 緯有拳胡床者大鬼對己前據処之乃揚声厲色曰君何
 謂鬼无靈耶使曳

〔144〕

光世音聲未及絕。住床後有一人狀若將帥者。可長丈餘。著黃染皮袴褶。手提念杵。以擬鬼。便驚懼散。走甲曹之屬。忽然粉碎云々。
 惠簡念光世音鬼神捨居処去。
 刑洲聽事東有別齋三間。由來多鬼。恒惱人。至建武時。猶无能住者。唯王周旋。惠簡道人。素有瞻識。獨出居之。以二間。施置經像。住自一間。既涉七日。因夜坐。忽一人黑衣。无因從壁中出。便來。獼簡開心了。唯日不得語。獨專念光世音良久。鬼仍謂道人曰。聞君精進。故來相誠。神色不動。止之久。相逼。愆然。還入壁中。簡起。滲瀨。拜礼。諷誦。然後還。眠。忽夢向人。謂之曰。僕以漢末。居此數百年矣。為性剛直。多所不堪。君有淨行。特相容耳。於此遂絕。簡住。弥年。安隱。餘人猶无能住者。

光世音聲未及絕。住床後有一人狀若將帥者。可長丈餘。著黃染皮袴褶。手提念杵。以擬鬼。便驚懼散。走甲曹之屬。忽然粉碎云々。

(33) 惠簡念光世音鬼神捨居処去

刑洲聽事東有別齋三間。由來多鬼。恒惱人。至建武時。猶无能住者。唯王周旋。惠簡道人。素有瞻識。獨出居之。以二間。施置經像。住自一間。既涉七日。因夜坐。忽一人黑衣。无因從壁中出。便來。獼簡開心了。唯日不得語。獨專念光世音良久。鬼仍謂道人曰。聞君精進。故來相誠。神色不動。止之久。相逼。愆然。還入壁中。簡起。滲瀨。拜礼。諷誦。然後還。眠。忽夢向人。謂之曰。僕以漢末。居此數百年矣。為性剛直。多所不堪。君有淨行。特相容耳。於此遂絕。簡住。弥年。安隱。餘人猶无能住者。



(34) 病人念觀音□ □臂摩其痕

月氏國有人得白癩病百種治不差乃至觀世音之像前
求哀情甚苦至像仍申臂摩其痕即時便差身身光
飭異本形像手即猶申不還

(35) 精惠誦經聾亡開明

宋元嘉廿六年青洲白苟寺道人精惠緣急病聾盲
頓失耳眼自念此非着疾又无質業唯當誓心帰觀世音
誦此經一千反誦數裁滿(耳)目不覺額然自(差)

(36) 癩疾之人擬遷居念觀音所病便愈

道豫道人說有一癩病人其家欲遠徙之病者求得
小停便仏前以身布地純念觀世音經日不起躰已冷貢唯
氣不尽忽起自言所病差便見不固十日中都好平復

(37) 法義致誠夢中洗符藏

沙門竹法義者山居好學後得病積時政治○日就綿篤
遂不復治帰誠光世音如此數日昼眠夢見一道人來診
候其病因為治□ □漚洗符藏見有結聚不

淨甚多洗濯畢

義曰病已除也眠覺來患瘧

然尋便復常

姓臺念觀音期日產生

有一人姓臺无兒息甚自傷悼於是就觀世音乞子在

僧前誓曰若以餘日生兒更非瑞應唯以四月八日生者則是

威神之力量以四月八日產一男字為觀世音云々

(39) 老嫗桃燈方里之外指光冥報記

彭城嫗者家世事仏○親屬並亡唯有一子索能教訓

兒甚有孝敬母子慈愛大至无倫元嘉七年兒隨到產

之伐虜嫗衝涕追送唯戒婦依觀世音家本極貧无以設

福母但常在觀世音像前燃燈乞願兒於軍中出獲為

虜所得其叛亡遂遠送北堺及到軍復還而嫗子不

反唯婦心燈像猶欲一望感徹兒在北亦怕長在念日夜

憤心復夜忽一燈離其百步誠往之致輕失去因即更見

在前已後如向疑是神異為自走遂比至天曉已百餘里

懼有見追藏住□(中)□日沒還復見燈遂尽停村乞

(17才)

彭城嫗者家世事佛。親屬並亡唯有一子索能教訓

兒甚有孝敬母子慈愛大至无倫元嘉七年兒隨到產

之伐虜嫗衝涕追送唯戒婦依觀世音家本極貧无以設

福母但常在觀世音像前燃燈乞願兒於軍中出獲為

虜所得其叛亡遂遠送北堺及到軍復還而嫗子不

反唯婦心燈像猶欲一望感徹兒在北亦怕長在念日夜

憤心復夜忽一燈離其百步誠往之致輕失去因即更見

在前已後如向疑是神異為自走遂比至天曉已百餘里

懼有見追藏住□(中)□日沒還復見燈遂尽停村乞

(38) 姓臺念觀音期日產生

有一人姓臺无兒息甚自傷悼於是就觀世音乞子在

僧前誓曰若以餘日生兒更非瑞應唯以四月八日生者則是

威神之力量以四月八日產一男字為觀世音云々

老嫗桃燈方里之外指光冥報記

彭城嫗者家世事仏○親屬並亡唯有一子索能教訓

兒甚有孝敬母子慈愛大至无倫元嘉七年兒隨到產

之伐虜嫗衝涕追送唯戒婦依觀世音家本極貧无以設

福母但常在觀世音像前燃燈乞願兒於軍中出獲為

虜所得其叛亡遂遠送北堺及到軍復還而嫗子不

反唯婦心燈像猶欲一望感徹兒在北亦怕長在念日夜

憤心復夜忽一燈離其百步誠往之致輕失去因即更見

在前已後如向疑是神異為自走遂比至天曉已百餘里

懼有見追藏住□(中)□日沒還復見燈遂尽停村乞

(16才)



食夜乘燈去經歷□□行平輒轉如千里遂還鄉
 初至正見母在像前伏燈火下目悟前所燈即是像前燈
 也遠近聞之无不助為悲喜其母子遭符神力倍精進
 兒終卒供養乃出家○一說嫗既失子恒燃燈觀音像前(昼)
 夜誦觀世音經希感聖神望一相見又恐或已沒兼四
 時祠之虜以嫗子為奴牧草沢当母祭祠之日輒夢還
 臨響母積誠一年昼夜至到後兒在山中亦見一光如
 柱形長一丈已十步疑是非常便往就之恒懸十步而
 疾走不及遂不得已十日至家々□直歸像前母正稽
 顙在地云々

(40) 帛法祈声其音清美

沙門法橋中山人也精勤有志行常欲誦眾經而為人
 特乏声氣毒不意々常憤然謂同覺日光世音菩薩令人現
 在得願今当至心祈求若微誠无感宿罪難(消)与其无声
 久存不若捨身更□□□食唯專心致誠三四日轉

就羸頓諸弟子共（日）声音稟受有定非一生所
 及和上当愛身行道何有其於取弊橋性剛決造因弥
 勵曰吾意久了慎勿相乱至五六日氣勢弥綿裁有餘
 息師徒憂惋謂其待尽而猶閉目叉手至誠不輟至七日
 朝曉狀開目如有悅色謂弟子曰吾得善心素水盥洗
 因杭聲作三偈音氣激亮二三里外村落士女咸共驚
 駭不知寺中何異音皆崩騰來觀乃橋公之聲也彼遂誦
 五千餘方言声音如鐘初（无）衰竭其時皆疑其道人也
 石虎未猶在年九十餘乃終比来沙門誠之者竺扶橋
 沙弥也

錫若鞠困回唐言也王字易科少代禪那唐言也
 波羅羯運代禪那唐言也又字易通困代禪那唐言也
 蒲羅王僧八長副位八德治政时東下度羯眉等摩
 伐村那唐言也回設賓也唐言也王各作且日陳有賢王曰入
 相也後是勝情舍而言人時大日安處唐言也隨餘麻
 早先王下子三思

(41) (大唐西域記卷五)

就羸頓諸弟子共（日）声音稟受有定非一生所
 及和上当愛身行道何有其於取弊橋性剛決造因弥
 勵曰吾意久了慎勿相乱至五六日氣勢弥綿裁有餘
 息師徒憂惋謂其待尽而猶閉目叉手至誠不輟至七日
 朝曉狀開目如有悅色謂弟子曰吾得善心素水盥洗
 因杭聲作三偈音氣激亮二三里外村落士女咸共驚
 駭不知寺中何異音皆崩騰來觀乃橋公之聲也彼遂誦
 五千餘方言声音如鐘初（无）衰竭其時皆疑其道人也
 石虎未猶在年九十餘乃終比来沙門誠之者竺扶橋
 沙弥也